

金子みすゞ「積つた雪」の語用論的分析

非平行的解釈を動機づける構造的条件

高 本 條 治*

(平成10年4月30日受理)

要 旨

金子みすゞの詩「積つた雪」は、三つの連から構成された短い詩である。各連は、いずれも3行で構成されており、それぞれが、よく似た統語構造をもっている。そこで、一見、この三つの連は平行的な解釈を受けるのが妥当なようにも受け取られる。しかし、この詩の解釈には一定の傾向が認められ、第3連に解釈的な重点や共感的な焦点が置かれやすい。このような非平行的解釈は、この詩の構造的条件によって動機づけられている。小論では、音韻形態構造、語彙統語構造、談話結束構造の特性が、どのようにこの詩の非平行的解釈を動機づけ、決定づけているかを明らかにする。

KEY WORDS

parallelism

平行性解釈

personification

擬人化解釈

interpretive potential

解釈可能性

interpretive priority

解釈優先度

1. 言語使用の構造的条件

言語学の一領域としての「語用論(pragmatics)」の任務は、言語使用の実現態・可能態¹⁾を観察・省察の対象としながら、(1)言語そのものの構造的条件、(2)使用者が有する認知的条件、(3)使用者を取り巻く社会的条件、この三者の力動的関係を捉えることにあると私は考えている。そのため、語用論では、言語そのものの構造的条件だけでは説明のつかない言語使用のありかたに強い注意と関心を向け、しばしば言語使用の認知的条件や社会的条件²⁾の側面をクローズアップすることが少なくない。例えば、言語使用の語用論的特性として、「適切性」、「間接性」、「不確定性」、「関連性」が挙げられるが³⁾、これらは言語そのものの構造的条件だけでは決定できない特性である。ある言語構造の使用が適切であるか否かは、話し手や聞き手の認知的条件や、それを制約している社会的条件によって評価される。間接発話行為が特定の状況で果たす発語内効力はどのように査定されるか(間接性)、ある発話が文脈の想定のかたに於いて個別的・具体的意味をどのように変化させるか(不確定性)、話し手がある発話に見込んだ解釈は聞き手によってどのように選び取られるのか(関連性)——。このような問題についても、使用者が有する認知的条件や、使用者を取り巻く社会的条件を考慮することなしに、適切な記述や説明を行うことはきわめて難しいであろう。

* 言語系教育講座

しかし、「語用論」が言語学の一領域であるという見方に立つならば、言語そのものの構造的条件への注視と洞察を抜きにして、いきなり認知的条件や社会的条件に目を向けるのは望ましくない。語用論的な記述や説明が、言語そのものの構造的条件だけでは充足・完了しないものであるからこそ、いったいどこまでが構造的条件の責任であるのか、その責任の範囲を明確化する作業が、まずもって必要である。その上で、言語そのものの構造的条件が、使用者が有する認知的条件や、使用者を取り巻く社会的条件によって、どのように乗り越えられ、場合によっては、どのように破棄されるのか、という方面に考察が展開されていくべきである。

そのような見方に立って、小論では、金子みすゞの詩「積つた雪」の解釈を事例として、この詩に対する語用論的な解釈が、この詩のもつ構造的特性によってどのように動機づけられているのかを検討する。また、その検討を通じて、この詩の解釈の可能性と優先度について語用論的な観点から分析を行う。したがって、小論は、この詩の解釈を制約している構造的条件を、語用論的な見地から明らかにしようとするものであって、この詩に対する文学的研究や文芸的批評をめざすものではない。

2. 金子みすゞ「積つた雪」の解釈上の問題点

金子みすゞの「積つた雪」は、次のような短い詩である⁵⁾。

(1) 積つた雪 金子みすゞ

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしてゐて。

下の雪
重かろな。
何百人ものせてゐて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面^{ちべた}もみえないで。

この詩は三つの連から構成されており、各連は、第1行目が雪を三層に捉えて、それぞれ、「上の雪」、「下の雪」、「中の雪」に言及し、第2行目で「さむかろな」、「重かろな」、「さみしかろな」と述べ、第3行目で、その理由を倒置的・追叙的に言いさしの形で述べている。つまり、三つの連は、平行的・並列的な表現構成がされており、その限りでは、三層に捉えた雪を、いずれも対等の立場で、ただ平行的・並列的に列挙しているかのように見える。

ところが、この詩に対する評釈や鑑賞の中には、第3連の「中の雪」に解釈上の重点を置いたり、そこに焦点を当てた共感的解釈をしたりしているものが少なくない。例えば、酒井大岳『金子みすゞの詩を生きる』（JULA 出版局、1994年）では、「この詩にふれたとき、ほんとうにびっくりしました。いままで、だれがいったい『中の雪』を詠んでいるだろうかと——。」と

述べ、さらに続けて次のように述べている（下線は引用者による。以下同様）。

- (2) ふつう、わたしたちは、雪が降ってもまず表面しか見ていません。きたないものを全部かくしてくれて、雪はありがたい。車の事故が多いだろう。あそこのスキー場はどうか。もっとつもって学校が休みになればいい。そんなことを思うくらいです。ちょっと気のきいた人でも、川端康成の『雪国』に思いを馳せ、かんじきや角巻の風情を目に描く、くらいのところです。

これはちがいます。みすゞさんが「中の雪」になりきってしまっているところがちがうのです。(pp. 174-5)

また、矢崎節夫『みすゞコスモス…わが内なる宇宙』（JULA 出版局、1996年）では、「自分を雪の外に置いては、中の雪に気づくことはありません。」と述べ、「社会における中の雪とは、私たちごく普通の人のことでしょう。」という見方を述べたあと、さらに次のように述べる。

- (3) 上の雪と下の雪は最初にとけ、中の雪は残りますが、上と下の雪がとけたあととは、中の雪の中でも、上の雪と下の雪ができ、そして最後には上も下も中もひとつになって、とけていくのです。

このことに気づいたら、私たち中の雪は、なんとうれしい存在なのでしょう。

〔中の雪／さみしかろな〕と歌ってくれたみすゞさんによって、中の雪である私たちは、見えなくなっていたことを見、気づくべきことに気づくことができ、とても幸せです。

(p. 89)

あるいは、宮本光研「ひかりの向こうへ」（増田れい子〔ほか〕『エッセイで旅する金子みすゞの世界』所収、JULA 出版局、1997年）にも、次のような解釈が見られる。

- (4) 《積つた雪》では、上の雪、下の雪ではなく、何と「中の雪」に関心を寄せている。中の雪——誰がこれにこころ寄せたものがいようか。さみしかろな、空も地面もみえないで、と。(p. 72)

これらの解釈は、いずれも、第3連に解釈上の重点を置き、第3連の「中の雪」に共感的理解の焦点を当てている。つまり、このタイプの解釈のもとでは、この「積つた雪」という詩は、併置された三つの連が平行的な解釈を受けるのではなく、第3連が重点化され焦点化されることで、非平行的な解釈を受けているわけである。

問題は、この詩に対するこのような非平行的解釈が、どの程度まで、言語表現そのものの構造的条件によって動機づけられているのか、という点である。このことを分析するのが小論の目標であるわけだが、その前にこの詩の解釈について簡単な調査を行ったので、まず、その結果を示しておきたいと思う。

3. 「積つた雪」の解釈に関する調査

「積つた雪」をどのように解釈するかについて調べるため、一定の質問を行い、40人から回答を得た⁹⁾。調査にあたっては、詩を提示したあと、次のような質問を行い、それぞれの回答を具体的に記述してもらった。

- (5) 問A 「わたし」が最も心を寄せているのは、「上の雪」、「下の雪」、「中の雪」のうち、どれに対してか。

問B 「わたし」が「○○○」に最も心を寄せていると読むことができるのはなぜか。

(「〇〇〇」の部分には、問 A の答が入る)

問 A に対する回答は、次のようになった。

- (6) a. 「上の雪」と答えた者 …… 1人 (2.5%)
- b. 「下の雪」と答えた者 …… 1人 (2.5%)
- c. 「中の雪」と答えた者 …… 37人 (92.5%)
- d. 三つすべてと答えた者 …… 1人 (2.5%)

(合計) 40人 (100%)

このように大半の回答者が、「わたし」が最も心を寄せている対象として「中の雪」を選択している。つまり、「中の雪」を焦点化したり、「中の雪」に重点を置いたりする解釈が数の上では優勢であるという結果になった。

ただし、(6)の問 A には、少なくとも次の2点が前提とされていることに注意したい(通常、前提1の方は「存在前提」と呼ばれ、前提2の方は「叙述前提」と呼ばれる)。

(7) 前提1 「積つた雪」という詩には、「わたし」という人物が登場する。

前提2 「積つた雪」という詩では、「上の雪」「下の雪」「中の雪」のいずれか一つに、「わたし」が最も心を寄せている。

したがって、問 A に対して自分の答を導き出すときには、おのずとこの二つの前提を暗黙のうちに肯定してしまうことになる。その部分にとまどいを感じている回答者も当然見られた。例えば、前提1については、「『わたし』とは作者のことですか?」という質問が複数の回答者から出された。そういう質問に対しては、「『わたし』を作者のことだと考えてもいいが、必ずしもそう考えなくてもいい。」という返答をした。ここでの「わたし」とは、後述するように、「さむかろな」、「重かろな」、「さみしかろな」という表現に潜在的に前提されている推量の主体を、「わたし」と呼ぶというだけのことであるので、その「わたし」が作者と一致すると見るか見ないかということは、今回の調査では本質的な差ではないからである。

また、前提2については、「『上の雪』『下の雪』『中の雪』のうち、どれか一つだけに心を寄せていると見るのはおかしいのではないか」という質問が出された。このような質問に対しては、次の二つは内容的に同じではないということを指摘した。

(8) a. 「上の雪」「下の雪」「中の雪」のいずれか一つに、「わたし」が最も心を寄せている。

 b. 「上の雪」「下の雪」「中の雪」のいずれか一つだけに、「わたし」が心を寄せている。

その上で、(6)の問 B が前提としているのは、(8)の b ではなく、a の方であるという点、すなわち、この問は「上の雪」「下の雪」「中の雪」から排他的に一つだけを選び出すという回答を求めているのではなく、この三者の間で相対的に優勢なものがあれば、それはどれか、という回答を求めているという点を確認した。

これも後述することになるが、第1連の「さむかろな」、第2連の「重かろな」に注目した解釈作業を通して、「わたし」は第1連では「上の雪」に心を寄せ、第2連では「下の雪」に心を寄せていることが確認できる。また、第3連の「さみしかろな」でも、「わたし」は明らかに「中の雪」に心を寄せている。このように、「わたし」は、「上の雪」にも「下の雪」にも「中の雪」にも心を寄せているのであるから、(8)b のような前提は、当然、棄却されることになる。しかし、その場合でも、(8)a の前提まで棄却されるわけではない。

したがって、(7)の前提2の内容を叙述前提としてもつ(6)の問 A は、第1連から第3連のうち

のいずれか一つに、解釈上の優勢的地位を与えうるかかどうかということを確認するための問になっている。今回の調査結果では、この前提2を積極的に拒否した回答者、つまり、「上の雪」「下の雪」「中の雪」の三者すべてに「わたし」は等しく心を寄せているのであって、いずれか一つに相対的な重みづけをした解釈を行うことはできないと答えた回答者は1名だけであった。このことは、「積つた雪」という詩に関して、非平行的な解釈が多くの人に受け入れられやすいということを示している。

4. 非平行的解釈を動機づけている構造的条件

4-1 「積つた雪」という詩の表現特性

次に、(6)の問Aに対して「中の雪」と答えた回答者が、問Bに対してどのような回答をしているかを分類してみたい。回答者は、おおむね次の三つの表現特性のいずれかに着目して理由説明を行っている。

- (9) 表現特性1 第1連の「さむかろな」、第2連の「重かろな」が5拍であるのに対して、第3連の「さみしかろな」だけが6拍であり、五七調という韻律特徴をもつ詩全体の中で、ここだけがいわゆる「字余り」になっている。
- 表現特性2 「さむかろな」の「さむい」、「重かろな」の「重い」が皮膚や身体に感じる「感覚」を表す形容詞であるのに対して、「さみしかろな」の「さみしい」は、「感情」(心情)を直接表す形容詞である。
- 表現特性3 「上の雪→中の雪→下の雪」や「下の雪→中の雪→上の雪」という単純な配列順序でなく、「上の雪→下の雪→中の雪」という特色のある配列順序で、三つの連が構成されている。

そのうち、どの観点に着目しているか、数の上での分布は次のようになった。複数の観点から説明している回答者もいるので、合計は延べ数である。

- (10) a. 表現特性1に着目した者 …… 20人 (37.7%)
 b. 表現特性2に着目した者 …… 8人 (15.1%)
 c. 表現特性3に着目した者 …… 25人 (47.2%)

(合計) 53人 (100%)

この三つの表現特性は、「積つた雪」という詩の言語表現そのものがもつ構造的条件として、ごく表面的な観察から得られるものである。それゆえ、この詩に対して、ある一定水準の共通理解を求めようとするとき、それを保証する大切な役割を果たすことになる。

4-2 音韻形態構造レベルでの構造的条件

ところで、言語そのものの構造的条件は、おおまかに次に示す三つのレベルで捉えることができ、(9)に示した三つの表現特性は、その三つのレベルに対応している。

- (11) a. 音韻形態構造のレベル
 b. 語彙統語構造のレベル
 c. 談話結束構造のレベル

金子みすゞの「積つた雪」という詩は、いわゆる五七調という韻律特徴をもっている。この

ような韻律特徴は、音韻形態構造のレベルでの問題と見ることができる。「さむかろな」「重かろな」の「さむかろ」「重かろ」は、現代語では、「さむいだろう」「重いだろう」に相当する意味となる表現だが、やや古めかしい言い方、ないしは、方言的な言い方で、いかにも「俗謡的」な表現である。これは、主として五七調に韻律を合わせる必要性から採用されたものであろう。しかし、その点では第三連の「さみしかろな」だけが6拍で、いわゆる「字余り」になっている。

このように、第1連・第2連と、第3連には、音韻形態構造上の差がある。その差に注目することで、第3連を第1連・第2連とは非平行的に扱うという解釈傾向が動機づけられる可能性がある。

4-3 語彙統語構造レベルでの構造的条件

語彙統語構造のレベルで見ると、「さむかろな」、「重かろな」、「さみしかろな」という三つの形容詞の異同が問題となる。特に、「さむい」「重い」という形容詞と、「さみしい」という形容詞の相違点に注意する必要がある。「さむい」「重い」は、皮膚や身体部位を通じて知覚された感覚を表すク活用形容詞であるが、それに対して、「さみしい」は、内面にわき起こる心情や感情を表すシク活用形容詞である。ここには、「感覚」対「感情」という差がある。

第1連・第2連で、主体の「感覚」を表す「さむい」「重い」という形容詞が用いられているのに対して、第3連では、主体の「感情」を表す「さみしい」という形容詞が用いられている。ということは、第1連・第2連と第3連とは、語彙統語構造上の差が認められるということである。このような語彙統語的な構造条件もまた、この詩が非平行的な解釈を受ける上で、重要な働きをしていると考えられる。

もちろん、「さむい」「重い」「さみしい」という形容詞には、主体の感覚や感情を当事者的に表す用法以外に、次のように、対象のもつ属性を第三者的に表す用法がある。

- (12) a. 北海道の冬はさむい。
b. この荷物はとても重い。
c. この町は何となくさみしい。

ところが、この「積つた雪」という詩の場合、第1連の「上の雪／さむかろな」が、「『上の雪』は『さむい』という属性をもっていることだろうなあ」という推量判断を表していると解釈するのは、きわめて困難である。「雪」がもつ属性は、「冷たい」とは捉えることができて、「雪」が「さむい」という属性をもつとは一般には捉えにくいからである。第1連は、「つめたい月がさしているから、『上の雪』は『さむい』と感じていることだろう」という推量判断を述べていると理解するのが自然である。

また、第2連についても、「[下の雪が自分自身の上に]何百人ものせているから、『下の雪』は『重い』と感じていることだろう」という推量判断が述べられていると理解するのが自然である。もし、「重かろな」が、「[下の雪]自体が『重い』という属性をもっているだろうなあ」という推量判断を表しているのだとすると、「何百人ものせてみて」という第3行めの表現が、解釈上、いわば宙に浮いてしまう。つまり、第2連全体の解釈から、整合性や一貫性が失われてしまうのである。

さらに、第3連についても、「中の雪／さみしかろな」で、「『中の雪』は『さみしい』と感じていることだろうなあ」という推量判断を述べ、それに続けて、「空も地面もみえないで」とい

う表現で、「(というの) [中の雪には] 空も地面もみえないから」という判断の根拠を追叙している、と理解するのが自然である。ある当事者にとって、何かが「みえる」か「みえない」かを、他の者が判断するためには、その当事者の身になり、その当事者の立場にたってみる必要がある。ならば、「中の雪／さみしかろな」という推量判断を行い、その根拠を「空も地面もみえないで」と捉えている判断の主体は、明らかに「中の雪」の立場にたって、共感的な判断を行っているということになる。したがって、「中の雪／さみしかろな」について、「中の雪」が「さみしい」という属性をもっていることを第三者的に表しているという解釈には、無理が生じてしまうのである。

このように、この「積つた雪」という詩では、「さむい」、「重い」、「さみしい」のいずれの形容詞についても、対象（すなわち「上の雪」「下の雪」「中の雪」）の属性を表した第三者的な表現であると解釈することができる可能性は、きわめて低い。この詩の「さむかろな」「重かろな」「さみしかろな」は、「上の雪」「下の雪」「中の雪」のそれぞれの立場にたって当事者的・共感的にそれぞれの「雪」の「感覚」や「感情」を推量している、と解釈するのが自然なのである。

4-4 談話結束構造レベルでの構造的条件

最後に、この詩を、談話結束構造のレベルで見てみたい。このレベルでは、統語上の文境界を超えた結束性⁷⁾（意味のつながり）や一貫性（意味のまとまり）が、語彙統語構造のうちにどのように具現されているかということが問題になる。

この詩では、三つの連の配列順序に注目する必要がある。一般的な「上→中→下」や「下→中→上」という配列順序に比べると、この詩が採用している「上→下→中」という配列順序は特異な感じがする。そこに注目することで、最後の「中の雪」にウエイトが置かれているという説明をする回答が、今回の調査でも多かった。それらの大半は、「最後に位置しているものが最も強調されているはずだ」という経験的な推測にとどまっているものの、談話結束構造のレベルで捉えられた構造的特徴を、この詩を解釈するための条件として利用しようとしていることは明らかである。

実は、この詩を談話結束構造のレベルで見た場合、「中の雪」のことを述べた第3連が最後に位置しなくてはならない最大の理由は、「空も地面もみえないで。」という最後の一行にある。このうち、「空」は第1連との意味のつながりをつけている。第1連に「つめたい月がさしてゐて」と表現されている以上、当然、第1連には「月」の背景として「空」の存在が前提とされているからである。また、「地面」とは、この詩で三層に捉えられた「積つた雪」のうち、第2連の「下の雪」が接している地表のことであると理解される。このように、「地面」は第2連との意味のつながりをつけている。

文の境界を超えた、こうした意味のつながりは、一般に、「結束性 (cohesion)」とか「橋渡し (bridging)」と呼ばれているが、第3連の「空も地面もみえないで」という表現は、第1連、第2連の内容を有機的に第3連に結びつけ、その結果として、第3連をこの詩全体を統合する位置に置く上で、とてもたいせつな働きをしている。こういう談話結束構造的な条件も、この詩の三つの連に対する非平行的な解釈を動機づける役目を担っていると見ることができる。

(9)に示したように、(6)の間Aに対して「中の雪」と答えた回答者たちは、その理由（すなわち、問Bに対する答）として、この詩が有する音韻形態構造、語彙統語構造、談話結束構造の各レベルでの構造的特性に注目していた。以上、見てきたように、回答者たちがあげていた構

造的特性は、この詩の三つの連のうち、第3連に解釈上の重点を置く非平行的な解釈が優位となるように、この詩の解釈を条件づけ、動機づけている。「積つた雪」という詩の三つの連に対する非平行的な解釈は、このように、この詩の表現そのものの構造的特性によって条件づけられているのである。

5. 「積つた雪」の各連ごとの分析

以下では、前節までの議論をもう少し具体的なものにするため、金子みすゞ「積つた雪」を解釈する上で問題となるポイントを、問⁹⁾の形式で示し、その間に対する答がどのようにして導かれるのかを、語用論的な観点から分析的に見ていきたい。

5-1 第1連の解釈

「積つた雪」の題名と第1連を次に再掲する。

(13) 積つた雪

上の雪

さむかろな。

つめたい月がさしてゐて。

この第1連の解釈では、まず、2行目の「さむかろな。」を手がかりとして、この詩に潜在する「わたし」の基本的性格に注意を向ける必要がある。そのポイントは、次のような問の形で示すことができる。

(14) 【第1連の解釈上のポイントを示す問】

a. 「さむかろな。」は、誰の思いを表しているか。

b. また、それはどういう思いか。

しかし、この間に答えるには、まず、次のような二つの補助的な問に対する答が必要になるだろう。

(15) 【補助的な問】

a. 「上の雪」とは、具体的にはどのような状態の「雪」か。

b. 「つめたい月」とは、具体的にはどのような状態の「月」か。

どちらの問も、連体修飾句の意味的な曖昧性解消を行うための問である。この二つの間に答えるためには、個別的・具体的な情景を心に思い浮かべ、それをことばで表現することが必要となる。

aの問に答えるには、当然、題名の「積つた雪」を参照する必要がある。また、第2連の「下の雪」、第3連の「中の雪」との平行的関係にも解釈的意識を向ける必要がある。一般に「積もった雪」という名詞句は、「[雪が降った結果] 積もっている雪」というように敷衍して言い換えることができる。雪が積もるためには、その前提として、雪が降らなくてはならないからである。雪は、降りながら、徐々に積もっていくわけだが、この詩の第1連では「つめたい月がさしてゐて」と表現されていることから、すでに雪は降りやんでいる情景をイメージする必要がある。また、この詩では、「上の雪」「下の雪」「中の雪」と三層に捉えているわけであるから、うっすらと積もったという程度の積もり方では不十分である。雪は相当量、地表に積もってい

なくてはなるまい。こういう推論を通して、この詩に描かれた情景が個別化・具体化されていくことになる。

bの間に答えるためには、「つめたい月」という「共感覚」の表現を、うまく処理する必要がある。この例では、「月」の視覚的なようすを、「つめたい」という、皮膚で感じる温度感覚を示すことばで表現していると見られる。こういう、感覚の受容器官をあえてずらしたような表現のしかたを、意味論では「共感覚」と呼んでいる。「つめたい月」という共感覚表現は、第1連の個別的・具体的情景をイメージするのに重要なだけでなく、この連が帯びている情感や情調を解釈する上でも重要である。この表現は、「月」がもつ属性（例えば、天空での「月」の照り輝きかたや、「月」の光の地表への届きよう）を、共感的に「つめたい」と捉えている。しかし、読み手がこの表現から解釈するものは、第三者的に捉えることのできる「月」の属性だけではあるまい。そこには、そう捉えている主体の内面的な感覚が、重ね合わせられているはずである。

(14)に示したように、第1連においては、そのような主体の感覚が、どのように「上の雪」に対して共感的に向けられるかという点が、解釈上のポイントである。したがって、「つめたい月」がどのような月のあり方を示しているのかを個別的・具体的にイメージしながら、そのときの主体の感覚のありようにも解釈的な注意を向けておくことは、(14)の間に答える上でも重要である。

さて、その「さむかろな」についてであるが、前述の通り、この俗謡的な表現は、五七調という韻律合わせから要請されたものと考えられる。「さむかろ」は「さむいだろう」に相当する推量判断の表現である。ということは、推量判断の主体が、「さむかろな」という表現には潜在しているということである。

推量判断の主体が潜在しているということを、もう少し鮮明に意識するためには、「きっと」「たぶん」「おそらく」などの副詞を「さむかろな」の前に敷衍的に拡張するのが有効かもしれない。また、「さぞ」「さぞや」などを拡張すると、誰かが「上の雪」の身の上を共感的に推量しているという表現態度がかなり明確化される。すなわち、「さむかろな」に対して、「さぞや、さむいだろうなあ」というようなパラフレーズを解釈上与えてみるのである。

では、「推量判断の主体」とは誰か。あるいは、「推量判断の主体」をどう呼ばよいか。むろん、便宜的には、「作者」とか、「金子みすゞ」とかと呼んでも構わない。しかし、詩の中の虚構世界と、その詩が制作された現実世界とを安易に同一視するという取り扱い方は、必ずしも最善とは言えないかもしれない。そこで、ややくどいが、ここでは「詩の中の『わたし』」、あるいは、「作中の『わたし』」と呼ぶことにする。

一般に、発話には、「いま」「ここ」「わたし」が潜在している。言語学では、これを「ダイクシスの原点」と呼ぶ⁹⁾。文芸上の表現手法として、「歴史的現在」や「語りの視点」などが問題とされることがあるが、これらは「ダイクシスの原点」のうち、ある要素を意図的にシフトすることで得られる効果を利用している。

この「積つた雪」という詩には、「さむかろな」と推量判断する主体としての「わたし」が前提されており、潜在している。まず、この点に注意を向けることが、解釈上必要である。その上で、その「わたし」が、第1連では「上の雪」の身になって、「上の雪」が感じているであろう「さむさ」を共感的に心配しているというところに解釈を向ける必要がある。したがって、(14)に示した問に対する答は、例えば、次のようなものになるだろう。

(16) 【第1連の解釈上のポイントを示す問に対する答の例】

a. 詩の中の「わたし」の思い。(作中の「わたし」の思い)

b. 「上の雪」について、「つめたい月がさして」いては、さぞや、さむいと感じているだろうなあと、「上の雪」の身になって心配している思い。

一般に、「思い」とか「心情」を説明するためには、次の三つの要素を説明に盛り込まなくてはならない。

(17) a. その思いや心情をいただく「主体」

b. 思いや心情が向けられる「対象」

c. 思いや心情の具体的な「内容」

上の答のaでは、思いの「主体」を特定し、bでは、「対象」と「内容」を個別化・具体化していることになる。

5-2 第2連の解釈

「積った雪」の第2連を次に示す。

(18) 下の雪

重かろな。

何百人ものせてゐて。

「何百人ものせてゐて」とあるが、これは明らかに、「[下の雪が、自らの上に] 何百人ものせてゐて」と敷衍して理解することができる。つまり、「のせる」の動作主体（主語）は、「下の雪（が）」である。この第2連の解釈上のポイントは、この「何百人ものせてゐて」という表現が、擬人化解釈と非擬人化解釈の両方の可能性をもっていることに気づく、という点にある。そのポイントを問の形で示せば、次のようになる。

(19) 【第2連の解釈上のポイントを示す問】

「下の雪」がのせている「何百人」というのは、誰のことか。

しかし、この問に答える前に、第1連と同様、次のような補助的な問に答えておこう。

(20) 【補助的な問】

a. 「重かろな。」は、誰の思いを表しているか。

b. また、それはどういう思いか。

この問に対しては、第1連の場合と平行的に処理すればよい。

(21) 【(20)に対する答の例】

a. 詩の中の「わたし」の思い。(作中の「わたし」の思い)

b. 「下の雪」について、「何百人ものせて」いては、さぞや、重いと感じているだろうなあと、「上の雪」の苦しさに思いを寄せている思い。

これを確認した上で、前述の「ポイントを示す問」へと移行しよう。

すでに述べたように、この問に対する答を導く上で大切なことは、「何百人」という表現について、非擬人化解釈と擬人化解釈の両方の可能性があるということに気づくことである。つまり、「(人間たちを) 何百人ものせていて」という解釈と、「(上に積もった雪たちを) 何百人ものせていて」という解釈を比較検討する必要がある。

インターネット上で、「積った雪」に対する次のような感想を見かけた¹⁰⁾。

(22) 矢表に立ち直接外界の厳しさに曝される上の雪、そして何千という雪を縁の下で懸命に

支え耐える下の雪。最後の句によって、けれどそれらがどんなに幸せなことか「はっ」と気付かされました。

この場合、「何百人も」を、「下の雪」の上に降り積もっている雪のことであると解釈している。擬人化解釈の例である。それに対して、「何百人も」を、雪の上で生活をする人間のことでありと見る解釈もある。次の例は、「積つた雪」の第2連に対する英訳である(よしだみどり〔訳・絵〕『睫毛の虹』, JULA 出版局, 1996年, p. 49)。

(23) The snow at the bottom

Must feel burdened

Bearing the weight of hundreds of people.

この英訳には訳者本人が描いた挿し絵も付けられていて、雪の上にたくさんの人がいるようすが描き出されている。‘hundreds of people’という表現は、明らかに非擬人化解釈に基づいた英訳である。

「何百人」を雪の上に生活している人間のことでと見るか、あるいは、降り積もって、互いに重なり合っている雪のことだと見るか、これによって、この詩の第2連の個別的・具体的なイメージは大きく変容する。重要なのは、この点である。したがって、潜在的な解釈可能性として併存している、擬人化解釈と非擬人化解釈の両候補のうち、個々の読み手がどちらの解釈を選択するか、どちらの解釈を優先するかということは、重要な解釈問題なのである。

もちろん、必ずその一方に決定しなくてはならない、ということではない。二通りの解釈可能性があることに、いったん気づいてしまうと、そのどちらかだけを選択することはかなり難しい。こういう場合には、結果的には、双方の解釈可能性を、相対的な優劣関係は認めつつも、両論併記のままにしておくという処置のしかたがあってもよいところだと思われる¹¹⁾。

(24) 【第2連の解釈上のポイントを示す問に対する答の例】

二通りの解釈のしかたがある。

- a. 降り積もった雪の上で生活をしている人間たち
- b. (擬人化して捉えられた)「下の雪」の上に降り積もっている雪たち

5-3 第3連の解釈

「積つた雪」の第3連を次に示す。

(25) 中の雪

さみしかろな。

空も地面もみえないで。

前述の通り、詩「積つた雪」は、構造的に見て(音韻形態的にも、語彙統語的にも、談話結束的にも)、三つの連が単純な均質性、並列性、平行性をもって併置されているわけではない。言語構造に注意を向けると、第3連には、第1連や第2連に比べて異質性が認められ、第1連・第2連が第3連によって統合される関係になっていることがわかる。それゆえ、単純な平行的解釈は、維持しにくくなってしまいうのである。

例えば、第3連の末尾の行「空も地面も見えないで」に用いられている取り立て助詞「も」も、そのような構造的条件の一つとして働く。「空も地面も見えないで」に出てくる二つの「も」は、「Xに加えて空も、Yに加えて地面も」とか、「Xと同様に空も、Yと同様に地面も」というような「同列性解釈」で捉えるだけでは不十分なようである。この「も」には、「空さえも、

地面さえも」とパラフレーズできるような「譲歩性解釈」が要請されていると見られる¹²⁾。

譲歩性解釈がとられると、例えば、「空さえも見えないで」の場合ならば、「空が見えていれば、まだましなのに」というような評価が含意として発生する。「地面さえも見えないで」も同じで、「地面が見えていれば、まだましなのに……」という含意が引き出される。そして、この場合の「空が見えている」というのは、第1連の「上の雪」がもっている特性であるし、また、「地面が見えている」というのは、第2連の「下の雪」がもっている特性である。

したがって、それらを総合すれば、「空が見えている『上の雪』は、空さえも見えない『中の雪』に比べれば、まだましだ」、**「地面が見えている『下の雪』は、地面さえも見えない『中の雪』に比べれば、まだましだ」**、という文脈含意が導かれる。このような文脈含意のもとでは、第1連・第2連・第3連を対等の立場に置く平行的解釈は、明らかに棄却されているという点に注意する必要がある。ならば、この第3連から得られる解釈によって、読み手は、第1連、第2連との非平行性に目を向け、第1連、第2連との平行的解釈をキャンセルするように、おのずと動機づけられるはずである。その結果、第3連は、「積つた雪」という詩全体を統合する位置に据えられることになる。

しかし、もちろん、第3連は、第1連や第2連と平行的に解釈できる側面も有している。そのことを確認しておくために、第1連・第2連でも確認した問をここでも繰り返しておこう。補助的な問であるとはいえ、この詩に対して、ある一定水準の共通理解を保証する上で重要な問である。

(26) 【補助的な問】

- a. 「さみしかろな。」は、誰の思いを表しているか。
- b. また、それはどういう思いか。

(27) 【(26)に対する答の例】

- a. 詩の中の「わたし」の思い。(作中の「わたし」の思い)
- b. 「中の雪」について、「空も地面も見えない」のでは、さぞや、さみしいと感じているだろうなあと、「中の雪」の気持ちになりきって同情している思い。

さて、ここで、この詩の構成が「上の雪→下の雪→中の雪」という配列になっていることに対する整合的な説明が、問われなくてはならないだろう。第3連の解釈上のポイントは、まさにここにある。第3連は、第1連、第2連と単に平行的にならんでいるだけでなく、この「積つた雪」という詩の全体を統合する位置にあるということに気づくことと、この詩における三つの連の配列とは密接に関連しているからである。

そこで、この連の解釈上のポイントを問の形で示せば、次のようになる。

(28) 【第3連の解釈上のポイントを示す問】

この詩は、「上の雪」→「下の雪」→「中の雪」という順番で構成されている。なぜ、そうする必要があったのか。

こういう問に対して、返ってきやすい答は、「最後のものが一般に強調されることが多いから」という類の答である。そういう答え方を完全に退ける必要はないだろうが、これでは答になっていない。問題は、なぜ、一般に強調されることが多い最後の位置に、「中の雪」をもって来たのか、というところにある。答を導き出す上で大切なことは、「空も地面も見えないで」の「空」や「地面」が第1連、第2連の内容と結びついているという点、さらに、「も」という助詞の解釈から一定の含意が発生するという点である。次に示すのは、答の一例である。

(29) 【第3連の解釈上のポイントを示す問に対する答の例】

たとえ「つめたい月がさしていて」さむくても、「上の雪」には「空」が見えているし、たとえ「何百人ものせていて」重くても、「下の雪」には「地面」が見えている。それなのに、「中の雪」には「空」さえも「地面」さえも見えない。ということは、他の者からも「中の雪」が見えないということだ。詩の中の「わたし」は、そうして他者と交流することもなく、孤独な立場に置かれた「中の雪」のさみしさにひとときわ同情し、心を寄せている。このように、第3連は、第1連・第2連の内容を受けて、それと対比することで「中の雪」のさみしさを述べているので、この詩の最後に置く必要があったと考えられる。

6. お わ り に

生前、金子みすゞの最大の理解者であった弟の正祐は、みすゞから、遺稿となった自筆の童謡集をあずかった際、みすゞに宛てた長文の書簡の中で「積つた雪」について次のように短評している。(矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』, p. 241)

(30) 「積つた雪」巧妙。

この詩は、正祐が言うように、確かに「巧妙」に仕組まれている。この詩の言語表現そのものがもつ構造的條件は、「巧妙」に私たち読み手の解釈を制約している。その構造的條件は、以上述べてきたように、音韻形態構造のレベル、語彙統語構造のレベル、談話結束構造のレベルのすべてにわたっている。

「積つた雪」の解釈の可能性と優先度の問題を、語用論的な観点から記述するためには、構造的條件の他に、認知的条件と社会的条件を加味する必要がある。しかし、詩の解釈について、ある一定レベルでの共通理解をもつためには、まず言語表現そのものの構造的條件をしっかりと捉えておくことが前提条件となる。小論では、その部分のみに照準を合わせた。

注

- 1) 実際に使用された発話（またはその断片）の、その使用のありかたを「実現態」と呼ぶ。それに対して、実際には使用されていないが、使用される可能性があったと意識される、潜在的な使用のありかたを「可能態」と呼ぶ。実現態の背後には、いくつかの可能態が潜在的に意識されることがある。
- 2) 使用者に固有の知識、記憶、信念、推論傾向等によって変動する条件を「認知的条件」と呼ぶ。また、使用者を取り巻く社会の制度、伝統、慣習や、使用者を取り巻く人間関係、使用者自身の社会的アイデンティティ等によって変動する条件を「社会的条件」と呼ぶ。
- 3) 言語使用の語用論的特性として、適切性 (appropriacy)、間接性 (indirectness)、不確定性 (indeterminacy)、関連性 (relevance) を挙げるのは、Grundy (1995) の見方。第11章参照。
- 4) 矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』（JULA 出版局、1993年）巻末の年譜によると、金子みすゞは、1903年（明治36）山口県大津郡仙崎村（現、長門市仙崎）生まれ。20歳ころから雑誌に童謡詩の投稿を始め、『童話』誌上で西條八十にその才能が認められた。1930年

- (昭和5), 26歳で死去。自殺であった。生前, 3冊の自筆詩集を編んだが, 長くその存在は忘れられていた。矢崎節夫がその遺稿集を発見したことから、『金子みすゞ全集』(JULA 出版局)が1984年(昭和59)に出版された。
- 5) 本文は、『金子みすゞ全集』(JULA 出版局, 1984年)の第2巻『空のかあさま』によった(p.242)。この詩は, 金子みすゞのアンソロジーの多くが採録しており, 代表作品の一つとして位置づけられている。
 - 6) 40人の内訳は, 学部学生34人, 大学院修士課程学生2人, 同修了生4人。学部学生については高本の担当授業中に調査を行い, それ以外は, 高本研究室で運用しているメーリングリストで調査を行った。
 - 7) 「結束性」については, 高本(1997a)参照。
 - 8) 以下の記述で, 「問」はあくまでも, この詩を解釈する上でのポイント(すなわち, 解釈の分岐点ともなる解釈問題のありか)を便宜的に示すためのものである。ここで提示する「問」が, 例えば, 国語の授業等において有効な「発問」となるかどうかというようなことは, まったく配慮していない。
 - 9) 「ダイクシス」については, 高本(1997b)を参照。
 - 10) 「こころの王国——金子みすゞ」と名づけられたページ。
<http://www.dtinnet.or.jp/~kenh/text/misuzu2.html>。
 - 11) 高本個人としては, 擬人化解釈の優先度の方が高い。わざわざ, がやがやした「何百人も」の人間を登場させては, この詩がもつ, 静かで優しい雰囲気がかわれてしまう気がするからである。つまり, この「静かで優しい雰囲気」というのが, 高本がこの詩から引きだそうとしている一貫性解釈ということになる。
 - 12) 取り立て助詞「も」に関する「同列性解釈」と「譲歩性解釈」については, 高本(1996a)参照。

参 考 文 献

- 高本條治(1994a)「何が旅ごころを誘うのか—JR 広告コピーの語用論的分析」, 学苑650。
 ———(1994b)「『おはなが ながいのね』の解釈—まど・みちお『ぞうさん』の語用論的分析」, 『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』, 三省堂。
 ———(1995)「カワセミは飛んでいるのか?—川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要 14-2。
 ———(1996a)「取り立て助詞『も』を契機とする同列性解釈と譲歩性解釈」, 上越教育大学国語研究 10。
 ———(1996b)「蟬がなきだすとお礼が口をつく事情—柳句『せみがなき出すとお世話に成ました』の語用論的分析」, 岡山大学国語研究 10。
 ———(1997a)「ただうなずいて見せたひと—川端康成『伊豆の踊子』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要 16-2。
 ———(1997b)「くもの悲しみ・わたしの悲しみ—八木重吉『雲』の語用論的分析」, 上越教育大学研究紀要 17-1。
 Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Black-

- well. [武内道子（ほか訳）『ひとは発話をどう理解するか』（ひつじ書房, 1994年）]
- Grundy, P. 1995. *Doing Pragmatics*. Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman. [安藤貞雄（ほか訳）『テキストはどのように構成されるか一言語の結束性』, ひつじ書房, 1997年]
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition. Second Edition*. Blackwell. [内田聖二（ほか訳）『関連性理論—伝達と認知』, 研究社出版, 1993年。邦訳は初版（1986年）による]
- Wilson, D. 1994. 'Relevance and Understanding'. In G. Brown, K. Malmkjaer, A. Pollit and J. Williams (eds.) *Language and Understanding*. Oxford University Press.
- Yule, G. 1996. *Pragmatics*. Oxford University Press.

A Pragmatic Analysis of *Tsumotta Yuki* by Misuzu Kaneko: Structural Conditions on its Non-parallel Interpretation

Joji TAKAMOTO*

ABSTRACT

Misuzu Kanako's *Tsumotta Yuki* (A Pile of Snow) is a short poem which includes three stanzas. Each stanza has almost the same syntactic construction of three lines. So it seems suitable that we may construe the three stanzas as in parallel. However, the interpretation of this poem has a definite tendency to be put more interpretive emphasis or more empathetic focus on the third stanza. This non-parallel interpretation is motivated by some structural conditions of this poem. In this paper, I describe how this non-parallel interpretation is motivated and determined by the features of phono-morphemic, lexico-syntactic, and discourse-cohesive structure of this poem.

* Division of Language, Department of Japanese Language